



門北に位置する礎石の心との距離を測ると2.21mとなり、門の柱間寸法4.42m [0.2960m×15尺=4.44m] を得ることができる。回廊北東隅礎石心と門の中軸線との距離は35.55m[0.2960m×120尺=35.52m]、回廊南東隅の礎石心と門の中軸線との距離は29.58m [0.2960m×100尺=29.60m] ある。門以北の桁行柱間寸法は、北隅部桁行2間の24尺と門15尺の北半7.5尺を120尺から引くと88.5尺、これを7間で割ると12.64尺となり、門以南では南隅部の24尺と門の南半を100尺から引いた68.5尺を5間で割った13.70尺となる。「楽門」の位置 東面回廊の設計について『概報Ⅱ』では門の位置と規模を決めてから、その南北を等間割りしたと推測している。そこで今回確定した門の設計上の重要性に注目してみたい。先にみたように、東面回廊の寸法は門の中軸線を境に以北が120尺、以南が100尺になる。この数字からみても門が回廊設計の基準になっていることがわかる。この中軸線を内庭側にのばすと、中金堂前庭部にある石敷SX7550の南辺と中門北の石敷SX7421北辺との間の距離34mを17mに等分する位置に当たる。

『興福寺供養次第』には「東西楽門〈回廊中央戸〉」とあるから、今回位置を確定した門が「楽門」であることは間違いない。「楽門」の中軸線が中金堂前と中門北側の石敷の間を2分する位置にあることから、「楽門」と両石敷はいずれかが基準となって設計された可能性がある。中金堂前の石敷南端（見切石）が文献に見える「砌」であることは既に指摘されている（『概報Ⅲ』）。『中右記』にも「中門北砌」とあり、これが中門北側の石敷の見切石を指すのか、今後検討すべき課題であろう。

さらにこの中軸線を西と東に延長すると、東金堂前の灯籠と西金堂跡前にある灯籠の中心点（東西金堂の中軸と考える）に一致する。「楽門」の位置は単に回廊設計の基準というだけでなく、中金堂院全体あるいは院周囲の建物とも関連していたことがうかがえる。

「楽門」と東西金堂との関係は中世の中金堂院を描いた絵図にもみることができる（第22図1）。



第20図 階段と東金堂（西から）